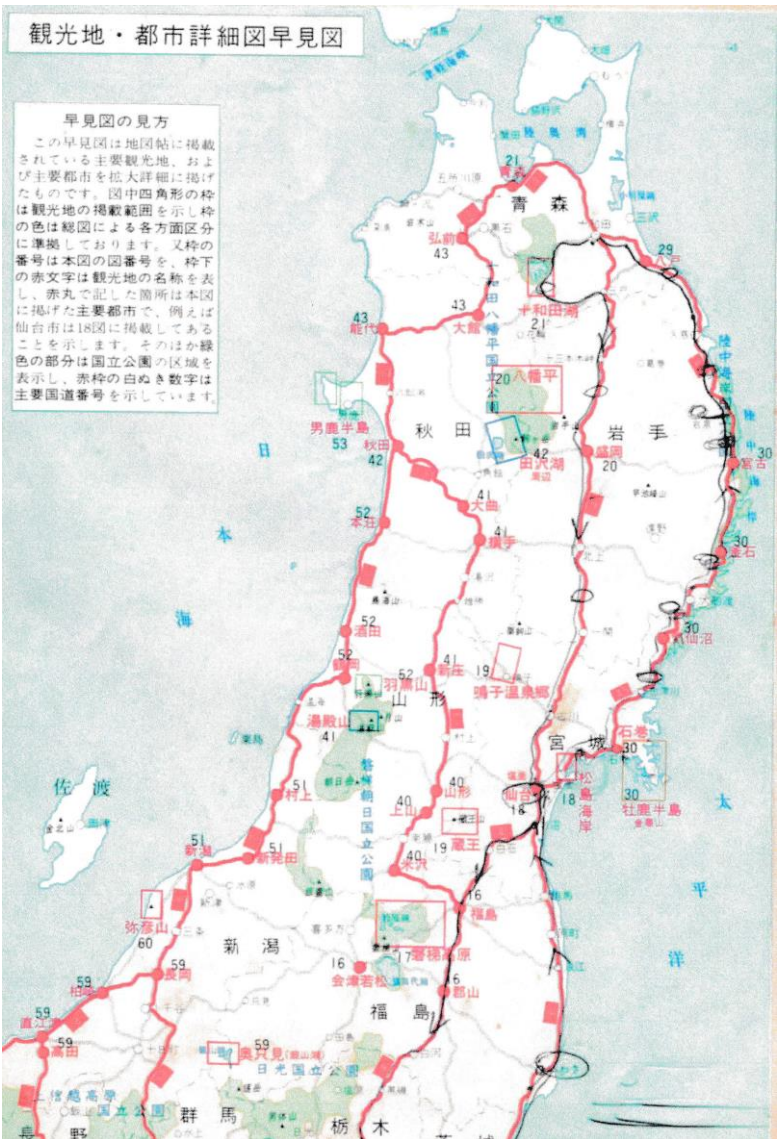


「はじめてのサイクリングの旅」―五〇年前の私、現在の私、そして五〇年後のあなたへ



ミリオンドラクス詳密 東北道路地図帳より(東京地図出版株式会社一九六八) 矢印のルートで
走行した。

旅は心を魅惑する冒険に違いない。そしてそこに多くを学んだし、これからも学ぶだろう。

日常の尺度ではなく、いかにもこの広い自然の尺度にふさわしい、非現代的な時間で、僕は毎日の生活を送っている。人間の魂は、自己を落ちついて眺めうる時間の長さだけ、豊かになるのかもしれない(辻邦夫 注一)。

旅は帰れるから楽しいのである。だから駅前のしょっからいラーメンがうまかったり、どこにもあるお土産屋をのぞいてみたりする(高見順 注二)。

はじめに

この章は、五二年前の夏に、大学一年生であった私と友人Kが東北へサイクリングの旅に出かけた記録(注三)をもとにまとめたものである。現在七〇歳である私が、過去の記録をまとめようと考えたのは、五二年前を単純に振り返ってみたかったという思いと、この先五〇年後に思いを託したかったからでもある。生前の父(注四)は、年月が経つのは早いこと、これから迎える年月は無限にあるように思えるのは若いときだけであることを述べていたことを思い出した。

私の世代は、いわゆる団塊の世代(注五)である。戦後のベビブームに生まれ、物心ついたときから同世代の人口が多いことを気にもせず、それが当たり前のようにつの時代を過ごしてきた。個人差はあると思われるが、何事にも好奇心が旺盛であり、大なり小なりの冒険心を持ち合わせた世代でもある。また、ハングリー精神もあったように思う。

このサイクリングの旅は、大学時代の個人的な体験をもとに書き下ろしたものである。この時代の雰囲気

気を読み取ることが出来るかもしれない。

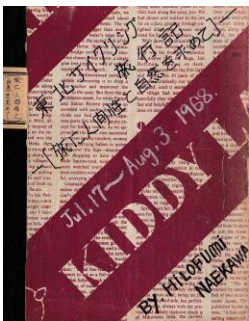
過去、現在そして未来をつなぐ思いを託して、サイクリングの旅を紐解いてみた。

二〇二〇年五月二三日記

注一 辻邦夫「海をよして変容」の冒頭部分に掲載。大学時代に影響を受けた作家の一人である。

注二 高見順「死の淵より」。大学時代、心に留めた作家の一人である。

注三 当時の日記メモとノート五十六ページ、ガリ版刷りの手記（東北サイクリング旅行記七十四ページ）、アルバム一冊が手元に残されている。



注四 父はカメラメーカーに勤務しつつ、俳句（没後、「夢の花」を出版）や随筆などを執筆・投稿していた。

同人誌の中に遺されていた一文から。

注五 第二次大戦直後の一九四七年〜一九四九年のベビーブーム時に生まれた世代。作家塚屋太一の同名の小説「団塊の世代」によって登場した言葉とされる。

(一) 東北へ 一九六八年七月十七日(水)

朝からすでに準備してあった荷物をながめながら、今晚出発するなどとは思えないほどのんびりと過していた。

午後六時四〇分、自転車に荷物を取り付け、集合場所の駒沢公園（注六）へ向かって出発した。家を出るとき、母から「おにぎり持っていく？」と声かけられたが、「いい」と言って、すぐ出かけた。すぐ近くに散歩でも行ってくるよといった調子で家を出たが、母は別段ということもなく、台所で天ぷらを揚げていた。妹が窓から顔を出して「ずいぶん荷物重いね」という。

川崎市溝口の自宅を出た時、自分（の家）飼育している伝書鳩（注七）たちとも、また二度と会えないかもしれないということが頭を一瞬駆け巡った。せめて無事に帰ってきたい。親より先に死ぬのは不幸である。

国道二四六号線を通り、二子橋から駒沢公園へと抜ける自動車道を走っていた。駒沢公園に午後七時に集合することになっていた。Kはまだ来ていなかった。K「来るとき、自転車がカリカリいって、どうも仕方がなかったよ」。近くの自転車屋でみてもらうことになった。自転車屋の二十五歳くらいの若い男に見てもらったが、よくわからないということだった。知人が昨年一人で九州へサイクリングの旅をしたことを話してくれた。「青森まで行くんじゃない、その自転車じゃ大変だろう」という。ましてやメーターをつけているので、より負担かけるといっても言われた。店の二階からは、その主人らしいのが顔を出して、「夜間は危ないから走らない方がいいよ」とアドバイスしてくれた。

八時一五分駒沢公園発。これからのことを思うと多少の不安と緊張の気持ちになった。祐天寺で盆踊りの浴衣姿の人たちが往来していた。Kの自転車が、またカリカリしたので、自転車屋を探した。ある店を見つけ、「こめん下さい」というと、年配のオヤジがぶてくれされた顔して出てきた。店の雰囲気もいいもっただめだ、やめようと思った。やはり的中した。そのオヤジ何か好きなテレビ番組でも見ていたらしく、「今日はおしまいね。明日、明日……」。その後は、自転車屋をみつめることはできなかった、霞が関ビル近くでKの自転車を止め、バックミラーを取り除くと、音はすっかりとれたが、メーターが動かなかった。このとき、Kと一緒にいることにわずらわしさを感じた。無性に一人になりたい気持ちになった。

桜田門、皇居、お濠を見ながら放送局、交通博物館、松坂屋、上野へ。目に映るものすべてが新鮮に見えてきた。浅草までは、驚くほどずいスピードであった。上野を過ぎたあたりで、K「今日は水戸まで走

つてしまおう」というので、随分と無茶なことを言うなど心がざわついた。

浅草付近で見かけた一八〜一九歳前後の浴衣姿の女の子を見かけたとき、下町情緒と相まって、何か奥ゆかしさというものを感じた。

深川から月島に出てしまい、道に迷ってしまった。あれーと思ったのは、はるか向こうに東京タワーがみえるのではないか。とんでもない方向へ来てしまったらしい。

松戸へ抜け出るために、門前仲町の交番で道を聞くことになった。交番前には、高校を出ていくらもたっていないと思われる警察官が立っていた。「松戸に行くにはどう行ったらよいか教えてください」。よくわからない説明だったので、途中また聞く羽目となった。

それから今度は緑町で迷ってしまった。都電通りを、今来た道を引き返して総武線のガードレールを右に曲がっていくと水戸街道に出る。交番で聞いた通りに行くが、それらしき道は見当たらなかった。路地に駐車していたタクシー運転手に聞くと、手前の道を指して、「ここをまっすぐ行けばいけるよ。どうもおかしい。さっきの運ちゃん、酒にでも酔って、でたらめ言ったらしい。

今にも店の戸を閉めようとしているところがあつたので、そこで改めて聞くことになった。京葉道路に行く道を正確に詳しく教えてもらった。我々は方向音痴となつてしまったのだ。東京の田舎へとは、このことをいうのだろうか。

東京を出ようと必死の思いだった。京葉道路を出たものの、またわからなくなつてしまった。地図を持っていたもののであてにならなかつた。同じような道を何度も行ったりきたりした。工場が多い。水銀灯で夜の歩道と橋の下の川が照らされて、印象深かつた。

次第に疲れてきた。出かけるとき、あれほどまで張り切つていた自分。夜間走行と何かすっきりしないモヤモヤしたものが入り混じり、まいってきたのを感じた。

東京の出口でモタモタシテいる我々。早く東京だけは脱出したいという気持ちはKと共通していた。

その晩は、松戸まで行くことになつた。

注六 現在の所在地は東京都世田谷区駒沢公園、目黒区東が丘二丁目・八雲五丁目。公園内には複数の

運動施設がある。駒沢オリンピック公園総合運動場と呼ばれている。一九六四年の東京オリンピック

ク開催時には、サッカー、レスリング、バレーボール、ホッケーの会場として使われた。

注七 当時、自宅庭で伝書鳩を約三〇羽、ニワトリ三羽を飼育していた。

(二) 明け方にグロッキー 七月十八日(木)

少し休むことにして、通りからはずれた小路へ入つていった。曲がれど、曲がれど、同じような家ばかりに出くわす。深夜なのでシーンとしてひっそりした家々がいやに不気味に思えた。葛飾区本田交番の明かりが見えたので、そこに自転車を止め、休むことにした。交番の中は誰もいない。たぶん巡回に行っているのだろう。一人、二人と深夜になつても人が通る。ここで何をしているのか、といったような目つきで、じろろ見ていく。

水戸街道に出る前に、作業員が一生懸命に道路工事をしていた。

明け方近くになつていたので、芝生のある平坦なところを探して寝ることになった。ゴルフ場であつた。自転車を倒して寝袋を取り出して、中に入った。蚊取り線香を近くに置き、休んだが蚊があまりにも多く寝られなくなつた。

寝るのはやめて、今日はこのまま走り続けることにしようということになった。水戸街道を走行中、途中、ある店に寄つた。店内には三人の客と中年の主人がいた。昨日、駒沢公園を出発したこと、これから青森まで行くことを告げた。「いいなあ、若いものはうらやましいよ……気を付けていつてきなさい」と送り出してくれた。

自転車の荷物が重く感じてきた。体もだるく足も痛くなつてきた。Kに告げて休むことにした。

朝方五時くらいであつたらうか。水戸街道の木立の下で休んだ。Kに起こされた時、夜が白々と明けていた。街道はトラックが猛スピードで往来していた。

牛久まで走ると、足ががくがくになった。Kもかなり疲れた様子であった。初日からこのような状態では、先行き蓄積疲労となって、旅自体が終わりになっては元も子もなくなる。そこで、ゆっくり休むことになった。

休んだところは、牛久沼の土手下であった。二年前の高校二年のとき、オオハクチョウ観察会(注八)にきたことを思い出した。土手下に寝袋を敷いて寝ることになった。五時四〇分頃であった。

目が覚める九時過ぎころまで、そこで休んでいた。寝ている最中、ボートを漕ぐ音、子供の声、ヒトの歩く足音がうつらうつらしながら聞こえた。土手上から労務者らしいのが、「あれ競輪の選手かな」などと言っているのが聞こえてきた。その後、一人の警察官が降りてきて「どこから来たの?どこまで行くの?」のんきな人であった。

九時三五分出発。先程の警察官が民家の後ろに座っているのが見えたので挨拶して出かけた。衣類を着かえて、気分一新して走り出す。真鍋という所で、氷屋に入り涼んだ。ここの氷はうまかった。店はお婆さんと中年女性が営んでいた。こゝでも旅の話をした。

水戸までは上下の坂が多く、しかも起伏に富んでいたには参った。時速三〇kmの速度で走った。

水戸市内に入り、今日はたがいに疲れていたこともあり、特別に旅館に泊まろうということになった。当初、我々の旅は、あまり金をかけないで、なるべく安く済ませる。野宿や学校などに宿泊することを目指していたので、特別のことであった。

市内裏通りにある安宿を探すことになった。映画館隣に旅行代理店N社の看板があったので寄ってみた。「この近くで安く泊まれるところないでしょうか?」「大洗の民宿なら安いところがある」。ここからは十数キロ離れているので、疲れている身には無理だとあきらめた。そこで店の男の人の案内で裏道へ。Nという小さな旅館であった(注九)。今から考えてみると、連れ込み旅館であった。とにかく横になって早く休みたい気持ちで先行した。旅館に入るとき、店の男の人が宿の女性と何やら交渉しているのが見えた。二階中央の部屋を通された。部屋に入ってから落ち着いたところにカルピスが出された。Kが風呂に入っている間に、これからの行程を考えながら、地図を広げたとき、何故か無性に一人になりたい衝動に駆られた。これまでのKと一緒に行動を共にすることで、苦痛を感じ、わずらわしさを感じないわけにはいかなかった。

明日からはマイペースでゆっくり走りたい。たとえ青森まで行けなくても充実した旅を過ごしたいと思った。この先、Kとペースを合わせてまでして旅をしたくはないとも思った。

夕食後、市内見物をした。ビヤガーデンの裏道を歩いていくと、小料理屋街があり、客引きの中年女が店先に立っていた。ある喫茶店前では、白い服を着た年若い女の子が、酒に酔ったような甘えた声で中年男を見送っていた。

宿に戻る途中、玄関前で食事のとき給仕してくれた女性が、「あら」なんて声かけてきた。部屋へ入ると、布団がすでに敷かれており、電気がつかない状態になっていた。

落ち着いて布団の中で寝られるのは、今日最後かもしれないなどと瞑想にふけた。

注八 東京動物園協会の動物愛好会主催の観察会。一九六六年二月に牛久沼畔で行われた。

注九 友人K(左)と。水戸市内のN旅館前で。



(三) ひとり旅に

七月十九日(金)

午前七時起床。頭が痛い。Kはよく眠れたらしい。朝日がかつと差し込み、今日も暑くなりそうである。日記をメモしていると、Kから「苗川、よく書くことあるなあ」と言われる。

九時二十五分発。旅館を紹介していたお礼のために菓子を買ってN社を訪ねたが、昨日の男の人はいなかった。市内を抜け国道へ出る。気分的にゆっくり走った。東海村入口で休憩。暑くなるにつれて、頭がポオーっとする。ペダルをこぎながら、照り付ける太陽を背に受け、灰色の道を見つめてひたすら走る。川尻十字路という所で昼食。外はジリジリト焼けつくような暑さ。すぐに喉が渇くため冷たいものが欲しくなるのだった。

午後三時過ぎころになると、快適に感じてきた。自転車の速度計を見ると時速三十kmと表示されていた。Kとはここで別行動をとることになった。旅に対する目的意識の違いを認め合ったうえでの行動であった。

午後四時二十五分。握手して東京での再会を約束した。Kは平市方面へ、私は勿来の関跡に向かったその晩は、勿来の叔父の家にお世話になった。突然訪ねたこと、またサイクリングの旅であることに、家族の人たちは驚いていた。

(四) 仙台駅で蚊に悩まされる 七月二十日(土)

あるドライブインで休みながら地図を見ていると、「何でもよいから氷二つと」注文して、オロナミンCドリンクを飲んだ運転手が「学生さん、どこから来たのだ」。「外は暑いから、俺の車に乗れ」といわれた。自転車を小型トラック車の荷台に乗せ、助手席に同乗した。車には「運輸と書かれてあった。東京―岩沼間の荷物を輸送しているそうで、今日は午前中に川崎から出て、これから岩沼まで行くという。気性の激しいひとのようで、前の車と追いつ、抜かれつ、カーレースを展開していた。ふとハンドルに目を向けると、オヤジさんの右親指がないことに気付いた。五〇歳前後の人であった。旅の話をした。やはり若いころに行っていたことがあるという。昔の道は凸凹道で舗装された道ではなかった。自転車は黒色の運搬車だった。

誰しもが若いころにサイクリングの旅なり、一人旅、放浪の旅といったものを経験し、それなりの夢を遂行している。千葉県・松戸の食堂で「いいなあ、若いものはうらやましいよ……」といったオヤジ。自転車屋のオヤジ。そして、ここにいる運転中のオヤジさん。この三人の話からも、若いころにそれぞれ何らかの思いを旅に寄せて、今となつては若者に対する羨望と可能性について読み取ることが出来るのだ。

部下から信頼を得るには、何か目的、目標をもってそれを確実にやり遂げることだとも述べていたことが印象的であった。

「自宅に寄つてお茶でも飲んでいきなさい」といわれ、オヤジさんの自宅まで乗せてもらった。大きな鉄工所を経営しているようだった。三人の息子さん自乗車を修理していた。「サイクリングをしている人を見つけてきたよ」といって、私を紹介した。丁寧にあいさつされたが、相手の方が年上であった。部屋に案内されると、年若い二〇代と思われる奥さんが出迎えてくれ、冷えたコカ・コーラをこちそうになった。

その晩は仙台駅構内で夜を明かした。蚊が多いことには閉口した。夜中、酔っ払いが大きな声でわめいてスタンド店員にからんでいた。駅構内の待合室にいる人たちのほとんどが、夜通しのようである。隣に座っていたオヤジさんにこれから行くところとする。国道四五線について聞いてみた。すると「四五線はひどいよ」ともらしていた。地図をしばらく見ていたが、私が寝ている間にいなくなりました。友人と午前二時の汽車で青森まで行くそうである。

(五) 楽しいひと時を

七月二十一日(日)

国道四五線沿いにペダルをこぐ。舗装された道が途切れて砂利道になったところの右側に店があったので昼食とした。ラーメンを注文。客はだれ一人いない。このラーメンまずい。インスタントラーメンらしく、作つたばかりなのに、麺が伸びて味もおかしかった。家で作って食べる方がうまいくらい、これで儲かっているのだろうかと思った。ケチはいえなかった。その店の小さな子供たちを見るにつけ、同情もしたくなった。子供たちの一番上と思われる中学生の男の子が一生懸命におふくろさんについて手伝っていた。

志津川へ出てから、あまり暑いので上半身裸になって、ペダルをこいで走る。歌津という所に着き、そのまま氷屋に入った。中から高二の女の子が出てきたので、あわててシャツを着こむ。店内には、客がおらず二人だけだったので、そこで一時間ほどくつろいだ。

「私ね、東京に出て働きたいと思うけれど、兄弟は男ばかりなのね。だから家の人が行かしてくれないの。是非行きたいと思っているのにさ。だけど今度修学旅行で東京へ行けるから、まあいいと思ってんけどね。動物大好きなの……東京の動物園でアルバイトもしてみたい……ミコら辺のアルバイトって安いの……高校生でも五百円しかくれないのよ。男女交際のことだけれど、誰と誰とが親しくなると、村中に知れ渡ってしまふの、何かいやネエ……女の子って思っている人がいてもなかなか口に出せないの……内の学校の男子も消極的で何がどうなっちゃっているのか、わからないわ、男女とも消極的なのもかもしれない……でも男の人ってイイわ。旅行するにしても、のびのびとできるでしょ。その点、うらやましいわ」。楽しいひと時を過ごせた。時々、小さい子供が「おねえちゃん十円」といって氷を食へに来る。かわいらしいと思った。帰り際にはがきを一枚もらおう。出発時には、小さな子供たちと一緒に見送ってくれた。しばらくしたところから振り返ってみると、まだ手を振ってくれていた。

夕方六時になっていた。近くに小学校があったので、そこに泊めてもらった。高台にある校庭から正面玄関へ。日曜日だったが、職員室に眼鏡をかけた男の先生が一人いるのが見えた。学生証を見せて、「今晚泊めてください」というと、その先生は、すくOKしてくれた。

「わしもそろそろ身を固めなきゃなあ。この辺は、些細なこと、噂話といったものがすぐ広がってやりきれないよ……土地のほとんどの人たちは半農半漁の生活をしておって、小学生の子供たちを人手不足のため学校を休ませて漁に行かせる。生徒を学校にだけは来させるように家に押しかけ、父母と話し合うこともあれば、取っ組み合いのけんかになることもあるんだよ」。「物質的なもので解決しようとしてはダメ。独創性を持った理論をもつこと。絶対的なものはこの世にはないよ」。

先生にかつ井を、ちそうになりながら、夜遅くまで語り合った。

(六) 陸中の海との対話 七月二十二日(月)

テレビからは、ヤング七二〇(注十)のテーマソングが流れてきた。着替えているときに、どこからともなく、ペルシヤの市場のメロディーが流れて、とても美しかった。

校庭の隅には二宮金次郎像と「夏が来る」という詩が書かれてあった。

夏休みが来る

さわやかな朝夕

あつい太陽

涼しい木陰

私たちは

なにかを読み

なにかをつくる

そして泳ごう

(原文のまま)

道端には、ヤギが、のんきに寝そべっていた。

トラクターとぶつかりそうになる。赤土の道がしばらくつづいた。

海水浴場へ寄ると、おばさんに話しかけられた。東京から来たといったら、外国からきた顔をされた。

気仙沼市では水族館に入った。入り口付近にいた三人から、「農大生は、こういうことをやるなあ」などと感心された。気仙沼からは巡航船で小鯖というところまでいった(注十一)。船中では、二人のオヤジさんから、これから先の国道四十五線について聞いてみた。かなり厳しい道であることを言われた。三陸海岸沿いに域には四十五線を通っていかなければならないので覚悟した。

下船後の道は、坂道の連続で御崎へ。素晴らしいところであった。これまでの道中では最も素晴らしい景色であった。

静かに、遠く。雨がしとしと降る午後のひとつときを心行くまで楽しんだ。

一人旅の良さを味わった。自然と何かを訴えたい気持ちになってきた。

絶壁の岩。断崖。雨が激しく振り続けた。体も自転車もびしょぬれ。

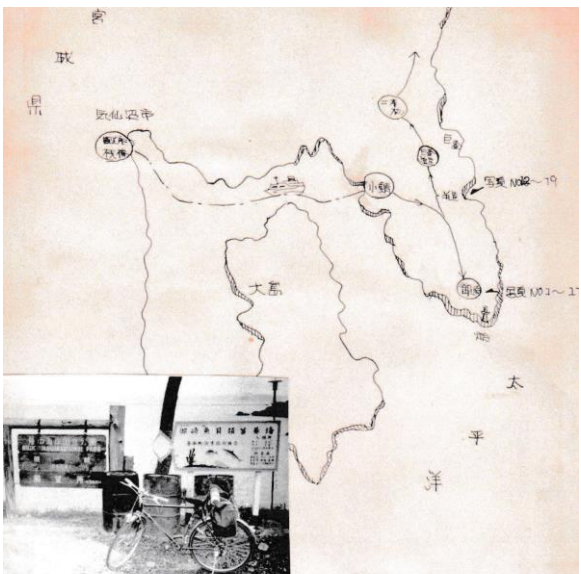
雨中、ペダルをこいだ。坂道が多い中を、何故だか頑張って走った。シャツが体にべっとりついた。

雨上がりの後、夕陽射す海を見下ろした時、きれいであった。

その日は、小学校に泊まることになった。

注十 ヤングセニ〇(ヤングセブンツォー)は、一九六八年当時、毎週月・土曜日のご前七時二〇分から八時)に東京放送(TBS)で放送された、トークと音楽が中心の若者向け情報番組(ワイドショー番組)であった。

注十一 気仙沼からは巡航船で小鯖。御釜半島をめぐる。



(七) 飯場に泊まる

七月二十三日(火)

午後六時半ころ平田という所に着き、橋の近くの店で牛乳とかき氷を注文した。酒を飲んでた四、五人の労働者が中にいた。店を出ようとした際、いちばん端にいた人が突然「家に泊まっていきなさい」と軽々しく言うので、酔っぱらった勢いでいるのだからか迷った。飯場に泊まってみたいという好奇心もあったので、その晩お世話になった。「俺はな、顔は怖そうに見えるだろうが心はあったかいだ」。隣にいた人からはジュースとパン四個買っていただいた。「パンは明日の夕飯にでもしろ」。

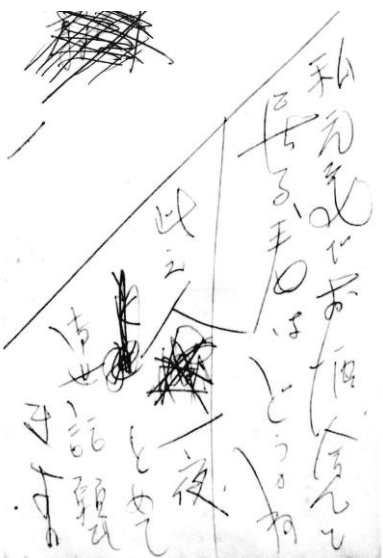
その店から、オヤジさんの家まではずぐであった。四部屋あり、どこも空いているという。部屋は、薄いベニヤ板で仕切られているだけだった(注十二)。夕飯を一緒に食べた。一升瓶を抱えて「今晚飲め」というので、びっくりしたが中身は水であった。また、缶ビールを飲むとき、あけるものがないのでナタでたたいてもらった。

食後、オヤジさんの話。「日本は下の方(階級)を使って、上の方(階級)は不正なことをいいかげんにやっていて、それでいて定年が長いのは不平。：人間は下等動物である。なぜならば、アリは夏になればせっせと働き、冬は冬眠して寝ながら食べていけるのに、ヒトはいつも働かねばならない。そういう面において、ヒトはアリに学ぶ必要があるのではないのか」。

天井には、心に太陽を持って書いた張り紙がしてあった。

翌日、オヤジさんに紹介していただいた田老町のO田さんを訪ねることになっていた。

注十二 飯場で泊まった部屋。田老町の○田さんを紹介していただいたオヤジさんからのメモ。



(八) 東北人とのふれあい 七月二十四日(水)

六時半ごろ、オヤジさん起きる。寝ている間、ネコが入ってきて押入れの煮干しをかじったことから、オヤジさん、ネコを中二階の窓から放り出す。その時、オヤジさんネコにひっかかれたらしい。

朝食時、食べろ、食べろとわが子のようにいう。塩分が多いので汁を多くとれともいわれた。

赤浜で昼食。オジさんに作ってもらった折詰め弁当とさんまのかば焼き缶詰を食べた。

田老町の○田さんを探すことになった。○田さんは、オヤジさんの戦友で、もし健在であれば米屋を営んでいることであつた。そのことを頼りに、交番で聞いてみると、同性同名の人が一人いるというので、その家に寄つた。米屋ではなかつた。普通の民家であつた。おばあさんが出てきて、話によると「庄三は、私の夫で戦後まもなく三九歳で亡くなつた」。飯場のオヤジが○田さん宅に着いたら連絡してくれると言われたが、亡くなられているのでできなかった。学生証を見せて、その晩は泊めていただいた。おばあさんと息子の若奥さんと孫の三人で暮らしていた。息子さんは船乗りで現在南洋へ出かけていることであつた。近くの銭湯へ案内していただいた。そこはオゾン湯であつた。銭湯から出ると、おばあさん、若奥さんと子供が立っていたのにはびっくりした。「あんたがあまりにも遅いんで、帰り道にでも間違えたのかと思つてね」。銭湯帰りに四人一緒に町内を見物。二〜三キロメートルは歩いただろうか。「この辺には、山王閣という立派なところもあるんですよ」。近くまで行つてみた。防波堤(注十三)が、かなり長い距離で続いていたのを覚えている。帰りに氷イチゴを、ちそうになる。静かで、きれいで、星が近かつた。

二〇一一年三月、東北大震災発生と大津波が三陸海岸に押し寄せた。過日、津波による死亡者名の中に、田老町に住んでいた○田さんと思われるご家族のお名前を新聞紙上で見かけた。年齢から察して、あの当時お世話になつたご家族に違いない。もしそうであるのなら、改めてこの紙面で、ご冥福をお祈りしたいと思う。

注十三 銭湯からの帰り道。○田さんのご家族とご一緒に散歩道。当時の田老町のパンフに書き込む。



(九) 偶然に

七月二十五日(木)

朝食三杯、味噌汁二杯、ウニ、生卵、のり、釜飯まで用意していただいた。水筒にはお茶を入れていただいた。「道中気を付けて」といわれ、こどもも東北人のあたたかみを感じた。

九時半に攝待という所に着く。そこで成蹊大生二人のサイクリストと出会う。東京文京区から日本海經由で東京に戻るというていた。熊ノ鼻で昼食。そこで爺さん、婆さんたちにサイダーとおにぎりをいただく。ウミネコが多く、双眼鏡から容易に見ることが出来た。

出発しようと荷物を自転車に積んでいるとき、下から一人のサイクリストが上がってきた。よく見ると、なんと勿来で分れた友人Kではないか。お互いびっくりする。偶然とはこのことをいうのだろうか。

そこから凸凹道を約二時間。Kと岩泉・龍泉洞へ出かける(注十四)。中へ入るとヒヤッとした。外の暑さとは対照的であった、NHKの人たちが水面を撮影録音しており、私たちにいきなりマイクを寄せてきたので慌てた。この日は、龍泉洞近くのベンチに寝袋を敷いて泊まった。

注十四 龍泉洞で記念スタンプ押印



(十) 寒い

七月二十六日(金)

一一時五〇分に中野という所に着く。坂道を上がっていくとき、一人のサイクリストと出会う。十和田からここまで三日かかったといっていた。

その日は普代村という所で泊まることになった。M田食堂という名前の店で夕食とした。サービスが良く、たくさん出してもらった。小料理屋風の店で、女将さんと小学生の女の子の二人でご飯と盛り付けしてくれた。「うちの息子が高校三年生で、現在旅に出かけているのよ」と女将さん。

今晚泊まることを探していることを女将さんに伝えると、中学校に泊めていただけよう交渉してくれた。中学校につくと、冷やしラーメンを女将さんが頼んだらしく届いたが、断ってしまった。今考ええると失礼なことをしたなと思う。校内の講堂から柔道用の畳を教室内に運び、寝袋を敷いて休んだ。

(十一) 気兼ねということ

七月二十七日(土)

七時十五分発。野田玉川に着くと、久慈市までは完全舗装であった。久慈海岸に寄ってみた。地元の小さい子供たちが、海からアワビやウニを採ってきては生のまま口の中に放り込んでいたのが印象的であった。この日は、Kと感情の対立が続き、終日不愉快な思いであった。

その日は、青森県に入り、小学校で泊まることになった。

(十二) 奥入瀬溪流

七月二十八日(日)

七時五分起床。学校は終業式らしく、生徒、教員全員が講堂へ向かっていった。教室からオルガンの音と共に児童たちの明るい元気な声がこだましていた。

海は広いな、大きいな、行ってみたいな、よその国：われは海の子、白波の……こんべえさんの赤ちゃんが風邪ひいた……。これらの歌を聴いていると、何か急に昔に戻りたいような、過ぎ去ったものに對する哀愁感、寂寞感、そして無常観みたいなものが沸き起こってきた。もう二度とこないということを思い浮かべ、思わずハッとした瞬間でもあった。

小学校を出発後、九時半に八戸市に着く。市内でコーヒを飲み、あるスタンドバー風の店に入った。若いママが一人いただけであった。ベンチャーズの十番街の殺人、パイプライン等の曲が流れていた。

十和田市でKと別行動をとることになり、Kは青森方面へ、私は十和田湖を目指した。一人旅になれるという開放感と今晚はデラックスなホテルにでも泊まりたいなど考え、心はずんできた。

午後三時に十和田市を出発。道中は、聞いていたよりも、思っていたよりも良い道だった。舗装が九〇%。地図なんてあてにならないものだ。奥入瀬溪流沿いに走らせたが、距離にして四〜五キロメートルはあったろうか、林内のトンネルを潜り抜けていく感じがして、涼しく快適であった。まさに別天地であった。

子ノ口については五時半であった。湖畔で地図を見ながら見る湖は、夕焼けに照らされ抜群であった。

出発しようとした時、体ががちりした大学生風の男と中年男が近づいてきて、「今晚、バンガローを組まませんか？」と寄ってきた。あまり気が進まなかったが、相手方に悪いと思ひ、バンガローに行くことになった。ああ、今晚はデラックスなホテルにでも泊まろうと思つたのに、バンガローに変わった。バンガローでガンバロウなどと自分でへたな洒落を作つて張り切ることにした。そこは子ノロキャンプ場という所だった。大小のテントが張つてあり、特大テント内で泊まることになった。中には、すでに大学生風の男が三人、我々含めて五人であった。テント内に入り、荷物整理しながら一人のサイクリストと話す。彼は福島県立N工業高校の三年生で、すでに就職先が決定していた。一九日に泊まった親戚の従兄弟のことを知っていたにはびっくりした。世の中は広くて狭いと感じた。大学生風の男たちは、青森県立A商業高校定時制の三年生であった。うまさうさに煙草をふかしていたので、てっきり大学生かと思つた。三人からは、夜遅く焼きそばを作つてもらい少しいたいだいた。テントの外では、高校生男女が輪を作つてフォークダンス(注十五)を踊っていた。

注十五 日本では外国から紹介された踊りを指すことが多い。当時は、校庭やキャンプファイヤーなどで見られた。ポピュラーな楽曲として「マイム・マイム」などがある。

(十二) 不気味な夜 七月二十九日(月)

六時起床。七時五〇分に子ノロキャンプ場発。奥入瀬川沿いは快適だったが、そのあと急坂続きで少し疲れる。八時四〇分休屋着(休屋は地名で休憩所ではない)。ジュークボックスから中村晃子の虹色の湖の曲が聞こえてきた。しばし十和田を眺め、思いにふけていた。

秋田県境にはいる。道端にエロ写真が落ちていた。三戸に向かって走つたが、急坂が多いことには閉口した。どこからかテンブラーズのエメラルドの伝説が流れて、とても抒情的になった。

爺さんが「なああーお前さんよ……この餅買ってこれ」と訳の分からぬ事をいっていた。

三戸市内でパンクの修理。午後六時になっていた。すでに日が暮れていた。今晚はいけるところまで行くと思ひ、ライトを点けて走つた。流れ星が目前を不気味にさつと飛んでいく。襟足がぞろとする。夜風もいやに不気味に体に当たる。亡霊が近くにひしめいているような錯覚をした。この時ほど、昼間の明るさを感じたことはなかった。と同時に人のことも。車が通るとほっとした。それに明るい街が欲しかった。

午後八時四五分、中山サービスマンという長距離専用のドライブインにつき、泊まることになった。寝ようとしてうつつらうつつらしていると、窓がキリキリという音がして、開いていくようなのでびっくりした。

(十四) しいサイクリスト 七月三十日(火)

八時過ぎ起床。ドライブインのジュークボックスからバーニーズの運命、未完成、ベンチャーズとスポーツニクスの曲が流れた。

道中、やけにしい、いやらしいサイクリストが後ろからびったりとついてきた。こちらがスピードをあけて、後ろを振り向くと、びったりついてきた。私を追い抜こうともしない。先に進んでもらうつもりで休憩、相手も自転車を止めて同じことをした。あくまでも一人で行きたいのに、こんな邪魔者が入つたのは、たまらない。バカヤロー。いい加減にしる。相手の話を聞くことにした。M工業高校三年生。東京・大森に就職が内定しているという。友人二人と日本海側から青森に抜け、そこから下つて水沢市に戻る予定

だという。そこは岩手県澁民村であった。

やはらかに、柳あをめる北上の、岸边に見ゆ、泣けど、こくくに……石川啄木(注十六)の記念碑を見る。後ろには、岩木山がそびえていた。そのサイクリスト、一人だと寂しいので、ついてきたらしい。

盛岡市内で、サイクリストと別れた。のんびりしたい気持ちが強かった。

午後、小岩井牧場に向かうため、盛岡駅前で自転車置き、小岩井駅までは電車で行くことになった。牧場では、乗馬を楽しみ、牛乳やアイスなどを味わい、しばしくつろいだ。

その後は、午後八時に水沢市内に入るまで走り続けた。歌が無性に聞きたくなり、テレビのある宿を目当てに探して走った。床屋の前で夕涼みをしていたオヤジさんに聞いてみた。「安いところを見つけてきてやるよ」といって、交渉に出かけた。元下宿屋という民家で、六〇〇円でいいというので、中に入った。テレビがなく、がっかりしたが、飯はうまかった。その家の親戚や子供たちがきており、花火をしてにぎやかだった。食堂で日記をつけていると、おばさんに追い払われる。変なおばさん。風呂もなく、トイレも汚く……。

注十六 大学一年時に影響を受けた歌人

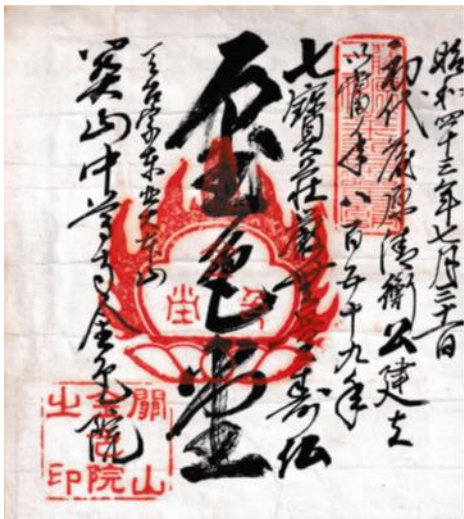
(十五) 岩手路

七月三十一日(水)

八時発。中尊寺へ向かって走る。中尊寺では、昨日のしつこいサイクリストと会ってしまった。挨拶してすぐ分かれ、奥の細道展を見学することにして、中尊寺で御朱印書を書いていただいた(注十七)

その後は、仙台に向かった。その日は、市内のユースホステルで泊まった。

注十七 金色堂での御朱印書と拝観券



(十六) 気持ち悪い女・上品な女

八月一日(木)

郡山市内には夕方になってしまった。安い旅館にでも泊まろうと思いましたが、感じ悪いのでやめた。路地裏にある旅館を訪ねた。何しろ、そこのおねえちゃんたら、金びかの歯を見せながら、まるで怪物のようで、気持ち悪かった。私に向かって、「何さ、フン、このバカ」とハッキリ聞こえるくらいの声で言った。ここにはお客も来ないはずだ。

次に思い立ったのがオールナイト映画。駅前の食堂の女の子に映画館の場所を尋ねた。「オールナイト映画は土曜日にしかやらないわよ」。「もし泊まる場所がなければ、私が知っている学生寮を教えてあげる」といって地図を書いてくれた。「今晚九時以降に来るように。私が地図に書いた目印の所に立っているから」とのこと。その場は別れた。その女の子は十八歳。宇都宮の汽車の食堂係、福島県人といった。

午後九時まで、時間があったので喫茶店「白十字」へ入った。地図を見ながら明日の行程を考えていると、後ろの座席にいた中年のオジさんが、「東京方面に行くのなら、小山市のTドライブインのさっちゃんという娘、俺知っているから、そこに泊まっていきなさい」と言われた。旅には偶然とはいえ、こんなこともあるのだ。

午後九時過ぎ、映画館前に置いた自転車に乗って、目的地へ向かう。途中、道路わきに女の子が立っていたが、昼間会った女の子と似ていないので、行き過ぎてしまふ。どうも様子がおかしいので、戻ってみると、その女の子がそうであった。私服を着ていたので見間違えてしまった。一緒に話しながら学生寮へ向かう。学生寮というよりは学生専門の下宿先であった。下宿先は、Sさんといい、おばさんが迎えてくれた。おばさんは、私のことを女の子の彼女と思っていたらしい。現在、日大工学部学生の部屋が空いているのでということ、案内していた。風呂に入れていただいた。本がギッシリ詰まっている二階の部屋に入った。すべて読みたくなった。

(十七) 旅行最後の夜

八月二日(金)

体がだるい。もっと寝たい気持ち。

朝食、こちそうになる。大変感激だった。まさかこんなにまでしてもらえると予想もしていなかった。その家の小さな子供が二人、子犬と遊んでいた。

八時五〇分出発。昨日紹介されたTドライブインへ。着くとすぐ女の子が出てきた。「郡山のK男さんから電話がかかってくる、サイクリングの男の人が行ったら、泊めてやってくれ」とのこと、「どうぞ」とドライブインの奥の広い畳の部屋(案内された)。荷物を置いた後、風呂へ入った。お湯が熱くて水で薄めても湯船内に入る事が出来なかった。

夜中、ジュークボックスの音楽が響いてくるので目が覚めてしまった。天使の誘惑、紫の夜明け、星影のワルツ、銀河のロマンス、花の首飾り、バラの恋人、新宿育ち、黄昏の銀座などがかかっていた。ドライブインの客層は、長距離の運転手が多いことを考えながら、流れてくるこれらの曲を興味深く聞くことが出来た。

(十八) 東京へ

八月三日(土)

朝食は、野菜炒めライスを食べた。食堂の爺さんが、エノケン(注十八)によく似ており、表情やしぐさを見ていたら、頼もしく思えてきた。

七時五〇分出発。周囲がこれまでの田園風景からギッシリとつまった家々。車、車、車。人、人、人。ああ！とため息をついた。にぎやかになるにつれて、やはり空気も濁っていた。

静寂から騒音へ。その接点は激しかった。

春日部、川越を過ぎると、いやでたまらなかった。帰るのが嫌になってきた。

車が多く、ジュツつなぎ。ムツとする人間。

うるさい。

逃避したくなった。

昼過ぎ、とうとう東京へ突入した。やけに暑かった。照り付けるような暑さ。

反吐を吐きそうだった。

新宿から、市谷、上智大学の方面を通り、二四六号線にでた。

渋谷から自宅に電話する。「今帰るよ」「ああそう、随分早かったのね」母は、心配していないようだった。

二子橋を渡り、川崎市溝の口の自宅へ。午後三時だった。

庭のヒマワリが花をつけていた。

注十八 榎本健一(えのもとけんいち)は、浅草を拠点として活動し、エノケンの愛称で広く全国に知られている俳優、歌手、コメディアンである。「日本の喜劇王」とも呼ばれていた。

あとがきにかえて

当時ガリ版印刷した記録(注三)のあとがきには、次のことが記載されている。

東北サイクリング旅行を何故行ったのか、またしなければならなかったのか、そして何故こういった紀行文を書かねばならなかったのか、その背景なり、動機なりを新たに印刷したのがこの紀行文である。

東北サイクリングの旅は自分にとってなんであったか自問自答している現在、将来このサイクリング旅行がどのように位置づけられるのか考えてみると、まさに生きようとしている自分であり、何かを絶えず

求めてやまない心境、そしてそれに対する煩悶、あがきであり、叫びであり、生きていた自分であった。その状態を大切にしたいと思う。

一九六八年七月一七日〜八月三日までの間、東北サイクリング旅行を行ったことは、青春時代の一ページを飾ることができた。もう二度と同じ身で行くときはないことを思うと、何かジーンと胸からこみあげてくるものがある。後の余生にしてこのような長期の遠距離のサイクリング旅行をしえるのはもうないと断言したい。

今となつては、この東北サイクリングの旅は過去のものとなつてしまつたが、時たまそれを思い出し、記録やスクラップブックをひもといつては、その時のことにひたり、心の糧にしたいと思う。

今、読み返してみると、恥ずかしい気持ちになるが、当時はこれが精一杯の表現だつたのだろうか。

この旅で得られた体験や人からの善意は、これまで別の形で別の人たちに、恩返しのもつりでも、還元して生きてきたように思う。

当時、サイクリングの旅をしていた高校生、大学生、社会人は、多くいたように思う。

現在はどうであろうか？ おそらくバイクによるツーリングを楽しんでいることが多いのではないだろうか。サイクリングとバイクでは一日に進む速度も、目にする景色の移り行く様子も異なるに違いない。

そして、未来は、どのような旅の形態や景色が、旅する人たちに刻み込まれいくのだろうか。

追記

友人Kのこと

大学卒業後、千葉県の中学校教員として勤務。結婚後、連絡とることが少なくなり、疎遠になつてしまつた。